

主にあつていつも喜べ

ルカによる福音 3:10-18

(そのとき、群衆はヨハネに、)「わたしたちはどうすればよいのですか」と尋ねた。ヨハネは、「下着を二枚持っている者は、一枚も持たない者に分けてやれ。食べ物を持っている者も同じようにせよ」と答えた。徴税人も洗礼を受けるために来て、「先生、わたしたちはどうすればよいのですか」と言った。ヨハネは、「規定以上のものは取り立てるな」と言った。兵士も、「このわたしたちはどうすればよいのですか」と尋ねた。ヨハネは、「だれからも金をゆすり取ったり、だまし取ったりするな。自分の給料で満足せよ」と言った。

民衆はメシアを待ち望んでいて、ヨハネについて、もしかしたら彼がメシアではないかと、皆心の中で考えていた。そこで、ヨハネは皆に向かって言った。「わたしはあなたたちに水で洗礼を授けるが、わたしよりも優れた方が来られる。わたしは、その方の履物のひもを解く値打ちもない。その方は、聖霊と火であなたたちに洗礼をお授けになる。そして、手に箕を持って、脱穀場を隅々まできれいにし、麦を集めて倉に入れ、殻を消えることのない火で焼き払われる。」ヨハネは、ほかにもさまざまな勧めをして、民衆に福音を告げ知らせた。

説教

そこでヨハネは、洗礼を授けてもらおうとして出て来た群衆に言った。「蝮(まむし)の子らよ、差し迫った神の怒りを免れると、だれが教えたのか。悔い改めにふさわしい実を結べ。『我々の父はアブラハムだ』などという考えを起こすな。言っておくが、神はこんな石ころからでも、アブラハムの子たちを造り出すことがおできになる。斧は既に木の根元に置かれている。良い実を結ばない木はみな、切り倒されて火に投げ込まれる。」 3:7-9

きびしい裁きのことばです。先週からルカの3章を読んでいます、今読ん

だところはきょうの朗読箇所直前にあたります。切り倒されて火に投げ込まれる、とヨハネに宣告された群衆たちは「では、わたしたちはどうすればよいのですか」こう尋ねます。するとヨハネは答えます。

- 1.下着を二枚持っている者は、一枚も持たない者に分けてやれ。食べ物を持っている者も同じようにせよ。
- 2.規定以上のものは取り立てるな。
- 3.だれからも金をゆすり取ったり、だまし取ったりするな。自分の給料で満足せよ。

2・3については正直にやれよ、という勧告といけとめればいいでしょう。1については施せという内容ですがヨハネのもとにきた群衆が支配者層、つまり金持ちではなく、ふつうの庶民、つまり貧乏人であれば「互いに助け合えよ、困った時はお互い様だろう」ぐらいの意味にも解釈できます。バプテスマのヨハネをあえて深読みしなければ、厳しい裁きをいつている割にはやれと薦めていることは常識的なこと、ただの道徳と解釈できないこともありません。

ヨハネは、ほかにもさまざまな勧めをして、民衆に福音を告げ知らせた。ところで、領主ヘロデは、自分の兄弟の妻ヘロディアとのことについて、また、自分の行ったあらゆる悪事について、ヨハネに責められたので、ヨハネを牢に閉じ込めた。こうしてヘロデは、それまでの悪事にもう一つの悪事を加えた。ルカ 4:18-20

きょうの朗読の最期のところに続いてルカ 3 章を最期までを引用しました。福音朗読に含まれなかったルカ 3 章最期の 20 節ではヨハネは投獄された、つまりいいたいことをいつていたので権力者ヘロデに睨まれて捕らえられた、ということルカは証言しています。最終的にはヘロデに殺されてしまうのですから、ヨハネの薦めというのは権力者にとって脅威となった。ただの道徳ではないのだということがここでルカは強調しています。

ヨハネが語った「ほかにもさまざまな勧め（18 節）」という内容は福音書には書いていないのでわからないのですが、証言されていないということはわたしたちは知らなくてもいいということでしょう。あえて知らなくていい

としたのは、わたしたち「ほかにもさまざまな勧め」をついつい自分で勝手に考えて作り出し誰かを裁くことがあるからです。「悔い改めにふさわしい実」を結ぶためにはこうしなければいけない、あれをやってはだめだ、と口うるさいことをいいたす、口だけならまだ我慢もできるのですが、権威・権力をかさに来て強要する、このようなことがついつい起こりがちです。ここでは、許し合う場所が裁き合う場所へと変わります。

朗読の後半部分は洗礼についてヨハネが語っています。わたしは水で洗礼をするけれど「わたしより優れた方」は「聖霊と火であなたたちに洗礼をお授けになる」といいます。ここはむずかしいというか、なにをいわんとしているのか聖書の証言だけではわかりません。「わたしより優れた方」はイエスのことで間違いないでしょう。でも「聖霊と火の洗礼」はどのような授けられるのか、誰が授けたのか、このことはどの福音書にも書いてありません。イエスは誰にも洗礼を授けていません。このことは洗礼をキリスト教の入信儀式として重んじている人たちにとってはちょっと困ってしまうのですが、イエスは洗礼を授けたとは福音書は証言していません。キリスト教の中にも洗礼の解釈をめぐるいろいろな考えがあり、残念ながら分派してしまっているのが現状です。（洗礼を二段階にわけて解釈している派閥もあります、一回目は水、二回目は聖霊と火という具合です）

さて、きょうは待降節第三主日です。伝統的に「喜びの主日」と言われてきました。洗礼者ヨハネがその到来を予告した救い主がすぐ近くに来ておられる、という喜びの雰囲気の中できょうの主日を祝おうじゃないかという日です。第二朗読では「フィリピの信徒への手紙」4章からみことばを聞きました。

主にあっていつも喜べ。重ねて言う、喜べ。主は近づいておられる。

(フィリピの信徒への手紙 4:4b)

わたしたちセカンドチャーチは、いきなりこう言われても「ハイわかりまし

た、喜びます」とはいかないよなあ、って思います。そこで補助線を引きます。

人間として生まれることが難しいこの世に生を受け、出会うことの難しい阿弥陀仏の本願にも出会い、起こし難（がた）い往生の志を起こし、離れ難い生死輪廻の世界を離れて、往生し難い極楽浄土に往生できるということ、これこそ喜びの中の喜びではないでしょうか。

「黒田の聖人へつかわす御文」（現代語訳は「法然のゆるし」新潮社 2011 年から引用）

法然上人が黒田の聖人に宛てた手紙からの引用です。「喜びの中の喜び」とは「主にあっていつも喜べ」（フィリピの信徒への手紙）を上手に説明しているなあ后感心したので、補助として引用しました。阿弥陀部の本願を「イエスの福音」に、往生の志を「回心」に、極楽浄土を「神の国」におきかえると（生死輪廻はキリスト教にはない概念かなあ）法然上人の手紙はキリスト者でも理解できる内容です。

人間としてこの世に生を受け、出会うことの難しいイエス・キリストの福音にも出会い、起こし難（がた）い回心の志を起こし、往生し難い神の国に往生できるということ、これこそ喜びの中の喜びではないでしょうか。

（読み替え、省略して引用）

イエス・キリストの福音にふれ、それを信じることができる、それこそが喜びの中の喜び、主にあっての喜びです。イエスの降誕日を待つわたしたちは裁きを恐れて回心するのではなく、福音を信じ、神の国を夢見て、喜びの中の喜びのうちにあってイエス・キリストを待ち望んでいます。さあ喜びのうちに待ち望みましょう。
